

きみに読む物語

2005(平成17)年2月13日鑑賞(道頓堀角座)

★★★★



第2章

やっぱり楽しいのが一番！

監督＝ニック・カサヴェテス／出演＝ライアン・ゴズリング／レイチェル・マクアダムズ／ジェームズ・ガーナー／ジーナ・ローランズ／ジェームズ・マーズデン／サム・シェパード／ジョアン・アレン (ギャガ・ヒューマックス共同配給／2004年アメリカ映画／123分)

……全米450万部のベストセラー純愛小説を映画化したこの作品は、韓流純愛ドラマとはひと味違うスタイルで、胸にジーンとくる感動作！ このタイトルの意味をじっくりとかみしめながら観てもらいたいものだ。また「少子高齢化」が不可避免的に進み、「痴呆症」が差別的用語として「認知症」の呼び名に改められた日本では、その面でもタイムリーな映画……？ それにしても、この主人公ノアのように、青春時代からずっと1人の女性を一生愛し続けることができる男性は、一体どれくらいいるのだろうか……？

『きみに読む物語』の美しさ！

〈きみに読む物語〉を語るのは、初老の男性デューク (ジェームズ・ガーナー)。そしてそれを静かに聴くのは、療養施設で暮らしている、これも初老の女性アリー・カルフーン (ジーナ・ローランズ)。この〈きみに読む物語〉とは、古き良き時代のアメリカ南部のまちを舞台とした純愛物語。今日は、アリー・カルフーンの病気の調子が良さそう。そこでデュークは大事そうに抱えた分厚い1冊の本をめくり、前回の物語の続きを……。今日のお話は、カーニバルで、南部の青年ノア (ライアン・ゴズリング) が陽気な美少女アリー・ハミルトン (レイチェル・マクアダムズ) と出会う最初のハイライトシーンからだ……。

アリー・カルフーンの病気と愛の奇跡は？

アリー・カルフーンの病気はアルツハイマー病。日本ではずっと痴呆症と呼ば

れていたものの原因の1つだが、最近痴呆症は差別用語だという議論が増えて、認知症に改名された。かつてアメリカ大統領であったロナルド・レーガンがアルツハイマー病であったことはよく知られているし、最近は私の知っている範囲内でもこの病名を耳にすることが多い。医学の進歩による寿命の伸びとともに、この病気が拡大していることは皮肉だが、仕方がない。いつか近い将来、この俺だって……？ 認知症の症状がひどくなると、自分の夫や妻、子供の顔や名前すらわからなくなってしまいうらい。また、映画の中でのドクターの解説によると、進行した認知症は決して元に戻らないとのこと。しかしこの映画では、デュークは愛の力、神の力が科学の力を超えることがあると信じ、くきみに読む物語を毎回少しずつアリー・カルフーンに語って聞かせていた。そして、そこから生まれた医学を超えた愛の奇跡とは……？

よくあるパターン　ひと夏の恋……？

この物語の主人公ノアは、ノース・カロライナ州のシーブルックにある材木工場で働く地元の労働者。そしてここシーブルックへ、南部の大都市チャールストンから家族とともにひと夏を過ごすためにやってきたのが、17歳のアリー・ハミルトン。ノアはアリーを見て一目惚れ。田舎の青年ながら、さすがアメリカはアピールの国……？ ノアは一直線にアリーをデートに誘う。その姿は多少滑稽だが、やはり何といっても女は「押しの一歩」に弱いもの……？ たちまち2人は恋に落ちて……？

良家の子女は意外と禁欲的！

今の時代の日本だったら、たちまち2人は2、3日のうちに「ベッドイン」となるだろう。しかし多分アメリカでは、今でも良家の子女はしつけが厳しいためそんなことはないはずだ。そしてこの映画が描くのは1940年という古き良き時代のアメリカ。その後第2次世界大戦が始まり、ノアは父親のフランク（サム・シェパード）と別れ、ドイツとの戦いのためにアフリカに派遣され、ロンメル軍団と戦うことになるが、これはストーリー展開上必要なほんの数シーンだけ。第2次世界大戦前のアメリカ南部の良家の子女は家庭のしつけも厳しく、意外と禁欲

的……？ 2人がやっとセックスに及ぼうとしたのは、ノアが将来買い取りたいと願っていた郊外の古い家の中。この古家の今にも抜けそうな床の上にピアノを覆っていた布を敷き、いざコトに及ぼうとしたが……？ こういう興味本位で、この2人のひと夏の恋と初体験(?)を見てはいけませんが、つつい……？

2人の釣り合いは？

シーブルックでひと夏を過ごしていたアリーの家族は、アリーがノアと付き合っていることを聞き、食事に招待した。ノアとアリーは、もともとそのよって立つ基盤が全然違うもの。すなわちアリーは良家の子女らしく、勉強の他お稽古ごとが忙しくてデートの時間もままならないうえ、頑張って勉強して大学に進学することは既定路線。それに対してノアは、地元に残って労働者として働くだけの一生しか考えられないもの。したがって2人のデートは、会っていればそれは楽しいものの、話をするとあらゆる面での考え方の相違が目につき、意見の衝突もたびたび……。2人の間でもそうなのだから、アリーの両親や親戚、友人たちにノアが紹介されても、このノアがアリーのまともな交際相手として認知されるはずがないのは当然。その食事の席での質問は、「お仕事は？」「収入は？」という厳しいものだった。

引き裂かれたノアとアリーは？

そして、食事終了後、母親のアン・ハミルトン(ジョアン・アレン)は、2人だけになった席でアリーに、「彼はいい青年だけれど……屑(トラッシュ)よ」と言い放った。もちろんアリーはこれに対して反発するが、父親も2人の交際を認めるはずはない。前述の古家でのデートが長引き、深夜2時にまで及んだ時は、何と警察官まで登場して探し回ることになった。そしてその挙げ句、翌日にはシーブルックでのひと夏の生活はジ・エンドとさせられることに。ある意味では予想されたとおりの展開で、ノアとアリーもお互いのひと夏の経験をいい思い出として次の生活が……？

しかしそうなったのでは、たくさんある皆さん方が経験した物語と同じになってしまい、映画にならなくなる……！

365通の手紙の悲劇！

アリーたち家族がシーブルックを後にすることになったのは、両親の細工（？）もさることながら、ノアにもアリーにも責任がある。この2人は、愛し合っているくせに話をしていると考え方の相違点が浮かびあがり、いつもケンカになってしまうのが悪いクセ……？ 夏が終わればアリーが帰っていくことはあらかじめ決まっているのだから、それを前提としてこれからの2人の交際のあり方を考え話し合えばいいのだが、毎日のデートを楽しんでいるだけの2人は、そんなことまで語り合う余裕はない。

そして、突然帰ることになったアリーに対して、ノアは適切な言葉をかけてやることができず、気持がすれ違ったまま、喧嘩別れの状態に。これぞアリーの両親の思うつぼだ。

しかし別れた後、ノアはアリーへの想いを断ち切ることができず手紙を書いた。それも1日1通必ず書いたため、その数は1年間でちょうど365通となった。しかしアリーからの返事はなし。そりゃそうだ、アリーに届いた手紙を母親が隠すことくらい簡単なことだから……。しかし、どうしてアリーは、ノアから手紙が届かなくても自分から積極的に手紙を出さなかったのか……？

ストーリーのつくり方、と言ってしまえばそれまでだが、365通の手紙の悲劇をみると、思わず「お前らバカか？」とってしまうが……。

ロンはいいヤツ……

ノアと別れた後、アリーには大学での勉強の日々が待ち受けていた。そして第2次世界大戦を迎える時代の中、看護実習生としてのボランティアに従事したアリーは、負傷兵ながら明るくアリーにデートを申し込む青年ロンと知り合うことに。ケガが治り社会復帰したロンは南部の大富豪の息子だから、日本での今風の結婚の条件である（？）3K（高学歴・高収入・高身長）は十分満たしているうえ、高家柄までついているから理想的。2人の仲はトントン拍子に進み、婚約から結婚式の日取りまで。ところがそうスナリ行かないのが、この映画のストーリー展開の面白さ……。

改装された古家とノアは？

アフリカ戦線から故郷に戻ったノアは、父親が家売り払ったお金で念願の古家を購入し、その改装に全力を注いだ。これは、アリーとの思い出を忘れ新たな人生に向かうためでもあったが、その途中で父親を失ったノアはやはりアリーへの想いを断ち切ることができないまま……。ロンとの結婚を近くに控えたアリーがこんなノアの存在を知ったのは、偶然見た新聞記事から。さて、そこでアリーがとった行動は……？

さて、2股かけの結果は？

言っちゃ悪いが、男の私としては、アリーはどうみてもノアとロンを2股にかけて、どちらにしようかと迷っているとしか思えない。「こちらを立てれば、あちらが立たず」になることは当然だし、アリーがどちらかの男1人を選ばなければならないのは当然だ。そんなことは、誰よりもアリー自身が1番よくわかっているはず。しかし、これがなかなかできない女ゴコロがこの映画では面白い……？ 客観的にみれば、ノアの方が分が悪いことは明らか。そしてアリーは誰もが納得するであろう結論を選択した。アメリカの民主主義が生きていると思うのは、母親のアンも、結婚を控えているロンも、その最後の選択肢をアリーに認めていること。これが個人主義、民主主義の真骨頂だ。したがって、これでアリーの選択は終わったと私は思ったのだが……。そこに生まれたちょっとした誤解は、ノアとアリーとのいつもの口喧嘩によって、アリーがロンを選択していたらしいということ。その結果、冷静に考えてみるとやっぱり……。去る2月9日に行われたサッカーWカップ予選での日本と北朝鮮との試合を見てもわかるように、何事も最後まで諦めてはダメだという教訓がここにも見えてくる。そして、ノアとアリーの2人の愛は一体いつまで続いたのだろうか……？

これが同一人物？

シーブルックを訪れたアリーに恋したノアは、当初少年の臭いがプンプンしている若者だった。しかし、第2次世界大戦でアフリカ戦線へ赴き、生死の境をさ

まよった後無事シーブルックに戻り、古家の改修に全力を傾けるノアは、すっかり大人。この地で1人暮らしを続けるひげをたくわえたノアは、少年期とは見違えるような魅力的な青年に成長していた。しかし人間の性分はやっぱり変わらないもの。嵐に恵まれるという幸運(?)もあって、改装されたノアの家を訪れてきたアリーとノアはやっと結ばれた。そして365通の手紙の悲劇も解明され、このまま2人の幸せが続くかのように見えたが……? アリーの母親がここを訪れ、さらにはロンも迎えに来ているという現実と直面したノアがとった行動は……?

原作に注目!

この映画の原作『THE NOTEBOOK』は、1996年に発売された後、全米450万部以上の大ベストセラーとなった、ニコラス・スパークスの長編処女作とのこと。彼は1965年生まれだから、まだ40歳前と若いのが、自分自身の祖父母の物語にヒントを得てこの小説を書いたとのことだ。今はやりの韓流純愛物語とは違う、アメリカ版ラブストーリーとして実によく出来ている。パンフレットを読むと、何と1998年に完成した彼の2作目が、ケビン・コスナー主演で1999年に映画化された『メッセージ・イン・ア・ボトル』であり、第3作の『奇跡を信じて』も2003年に映画化されているとのこと。

地理やアメリカ南部の勉強も!

アメリカは広いから、この映画の舞台となった、ノアが住むノース・カロライナ州のシーブルックがどこにあり、アリーの生まれ育った南部の都市チャールストンがどこにあるのかよくわからない。しかしそういう地理もきちんと勉強すれば、もっとこの小説やこの映画の良さがわかるはず。ちなみに、映画の中盤から登場するノアの恋敵のロン(ジェームズ・マーズデン)についても、南部の旧家の大富豪の出身ということしかわからないが、本当はその背景も勉強する必要がある。社会的地位や収入のバランスの他、同じ南部出身という意味でも、アリーはこのロンと一緒にの方が釣り合いがとれるのは当然。そしてアリーは結局どちらを選んだのか? それがこの小説のテーマであり、アメリカ版純愛ドラマの面白さだ。

2005(平成17)年2月14日記